

# 日本航空母艦。ピクトリアル

艦型図と模型で読み解く平甲板型空母と島型艦橋空母

Imperial  
Japanese Navy  
aircraft carriers  
pictorial

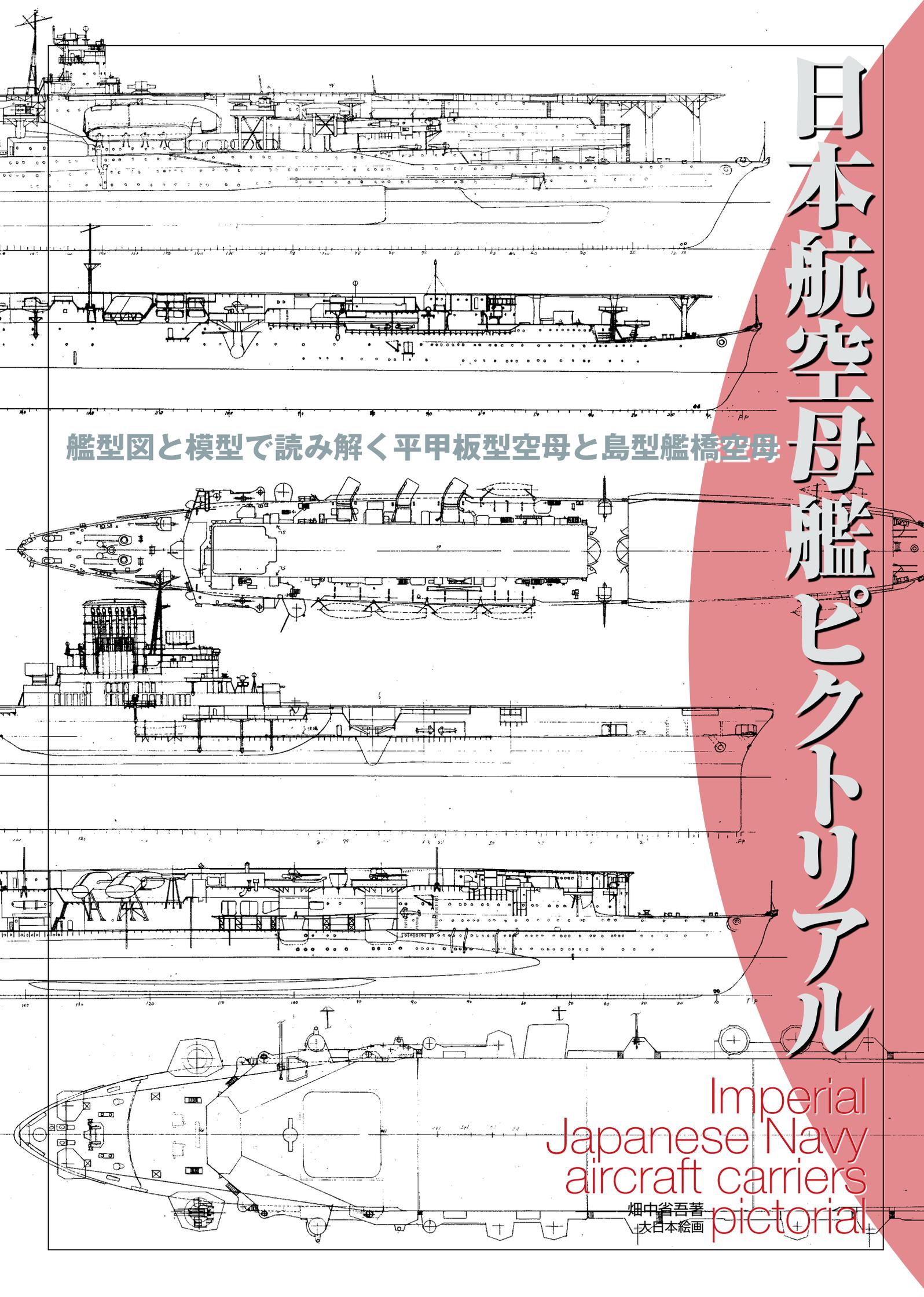
畑中省吾著  
大日本絵画

# 日本航空母艦。ピクトリアル

艦型図と模型で読み解く平甲板型空母と島型艦橋空母

Imperial  
Japanese Navy  
aircraft carriers  
pictorial

畑中省吾著  
大日本絵画





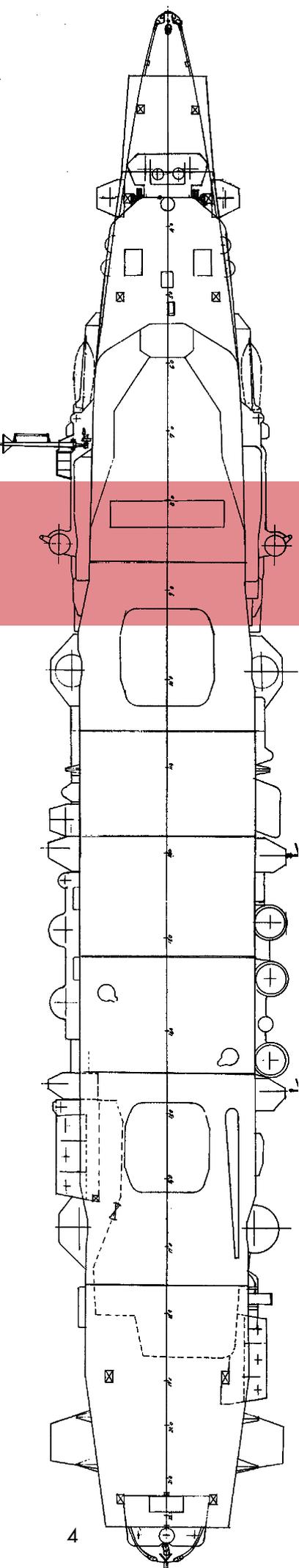
# 日本航空母艦。ピクトリアル

艦型図と模型で読み解く平甲板型空母と島型艦橋空母

## CONTENTS

日本の航空母艦のこと.....	4
平甲板型空母編	
鳳翔.....	6
龍驤.....	12
祥鳳型.....	18
龍鳳.....	24
千歳型.....	30
大鷹型.....	36
海鷹.....	44
神鷹.....	48
平甲板型空母のキット事情.....	52
島型艦橋空母編	
赤城.....	54
加賀.....	62
蒼龍.....	70
飛龍.....	74
翔鶴型.....	78
飛鷹型.....	84
大鳳.....	90
雲龍型.....	94
信濃.....	100

Imperial Japanese Navy  
aircraft carriers pictorial



軍艦には多様な任務があり、さまざまな艦種に分かれて作戦の一端をにないます。航空母艦（空母）は、飛行機を搭載して敵艦や敵地への攻撃を行なう役割で、英国が先鞭をつけた艦種です。その姿は、船体の上に格納庫という箱を乗せその上に平らな飛行甲板を置いた、他の艦種には見られない独特なスタイルです。大砲を積んだ戦艦や巡洋艦や駆逐艦に比べ、軍艦らしさの感じられにくい姿といえます。1970年代～80年代、艦船模型ファンのあいだでは空母の人気は戦艦などに比べ高くありませんでした。空母の中で名の通った真珠湾攻撃参加の6隻にしても、「蒼龍」「加賀」は正確な姿が不明で、ましてや平甲板型空母は軍艦ファンでも艦名を思い出せないものがあったくらいです。私は、日本の空母25隻の真の姿を知りたいと思い『世界の艦船』誌などの艦型図や写真を参考にしながら1/700の艦型図を描くようになりました。

1983年『タミヤニュース』で「軍艦雑記帳」という連載が始まりました。その素晴らしいイラストに魅了され編集部ファンレターを書いたところ、ある日、作者の森 恒英さんから電話をいただきました。図々しくも私は森さんに、空母の資料はありませんかと申し上げたところ、空母についてなら親友の長谷川藤一さんを紹介します、とおっしゃいました。長谷川さんの名前はすでに模型雑誌で知っており、さっそく長谷川さんに長文の手紙を差し上げました。長谷川さんは親切な方で、空母についてのご教示と公式図のコピーなどを多数いただくことができました。また、森さんの紹介で「軍艦の模型」の著者・泉 江三先生主催のイズミ・アソシエーツに加えていただいたのもこの頃です。空母艦型図を会報に投稿したところ、先生は「神鷹」の資料を送ってくださいました。ある所にはあるのだと知りました。

1997年に長谷川さんが「軍艦メカ図鑑 日本の航空母艦」を執筆されました。不明な点の多かった「蒼龍」「加賀」や鷹型空母の新資料が盛りこまれた、これまでにない内容の書籍です。およばずながら私も編輯の手伝いをして、あらためて空母の魅力に引きこまれました。現大和ミュージアム館長の戸高一成さんは「蒼龍」「加賀」の新発見の資料を貸してくださいました。新資料をもとに艦型図を新たに1/350で描き直すことにし、今度はできるだけ改装による変化も組み入れて、都合31枚（「伊吹」完成予想図含む）を描きました。この艦型図集はそれらをまとめたものです。

今では、空母は人気の高い艦種になったようです。それには、長谷川さんの著書の功績が大きいと思っています。空母各艦の姿を初めて明瞭にした著作だからです。ここにお名前を掲げたお世話になった方々に、深い感謝をこめてこの本を捧げます。

## はじめに

〈日本の航空母艦のこと〉



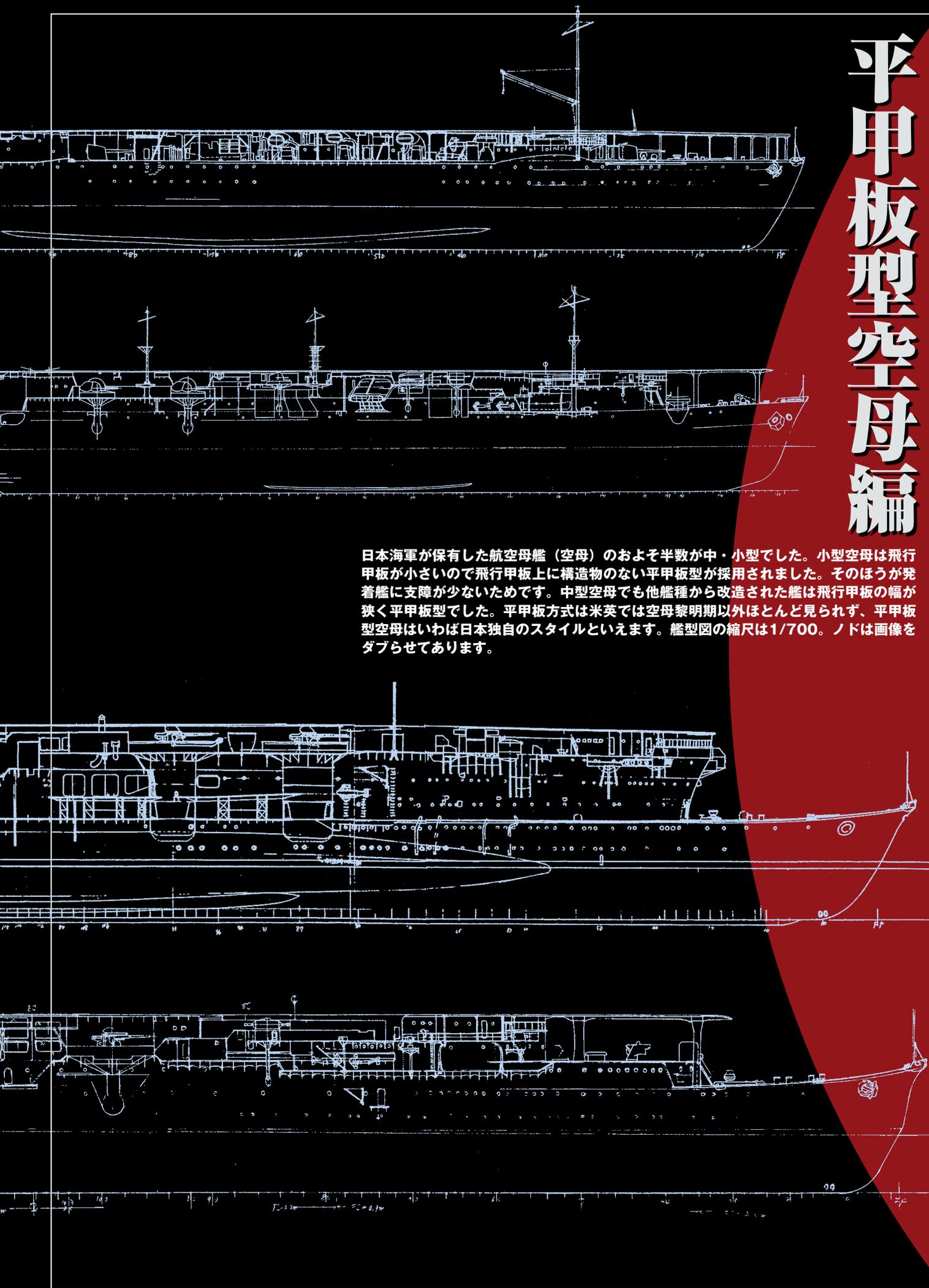
畑中省吾

Shougo HATANAKA

1951年、横浜市生まれ。小学生のときは今井科学、中学生のときはレベル、大学生以降はウォーターラインシリーズと、プラモデルは軍艦ばかりを集める。友人に船を語る者は一人もなく天涯孤独な船キチ人生かと思っただが、タミヤニュースへの投書がきっかけとなり「軍艦雑記帳」の著者・森 恒英さんから声を掛けてもらえる機嫌を得る。森さんのご紹介で艦艇研究のオーソリティたちと知り合い、艦艇趣味を謳歌する境遇になれる

# 平甲板型空母編

日本海軍が保有した航空母艦（空母）のおよそ半数が中・小型でした。小型空母は飛行甲板が小さいので飛行甲板上に構造物のない平甲板型が採用されました。そのほうが発着艦に支障が少ないためです。中型空母でも他艦種から改造された艦は飛行甲板の幅が狭く平甲板型でした。平甲板方式は米英では空母黎明期以外ほとんど見られず、平甲板型空母はいわば日本独自のスタイルといえます。艦型図の縮尺は1/700。ノドは画像をダブらせてあります。



# 「鳳翔」



世界最初の純粋な航空母艦が「鳳翔」だ。姿かたちは野暮ったいが、バランスだけはとれている。船型が過小なため飛行機の発達に対応できず、半生を練習空母として過ごした。その代わり、23年の長きにわたり飛行機乗りを育てあげ、海軍航空の浮き沈みをその目で見届けた稀有な空母なのである

竣工間もない1923～24年頃の撮影。艦体に光が当たって明るく、格納庫壁まできれいに写っている。昇降機は2基とも下げられ、3本の起倒式煙突は起状態、艦橋前の大型クレーンは横倒しにしてある。このアングルで見る艦橋は、大きさ・位置ともバランスがとれているように思える  
(写真提供/大和ミュージアム)

## ●空母黎明期に建造

第1次世界大戦が勃発した1914年頃から、英海軍は商船やフェリーなどを買ってきて水上機を偵察などに使用できるように改造した、のちの水上機母艦に相当する船舶を運用するようになり、日本でも大正末(1913～14年)頃に「若宮丸」「高崎丸」に水上機を搭載し、大陸での作戦に水上機母艦として運用しました。英海軍では1917年に大型軽巡洋艦を使って車輪つき航空機を運用できる母艦の実験を始めます。ご存じ大型軽巡「フューリアス」です。そして実験の結果、発艦はまだしも、着艦にはフラットトップであることが必要ということがわかってきます。さらに英海軍は1918年に世界初の全通平甲板型改造航空母艦「アーガス」を建造しました。こうした実績をもとに、改造艦ではなく最初から航空母艦(空母)として設計・建造されたのが空母「ハーミーズ」です。「ハーミーズ」は1918年に起工、「フューリアス」の改造の結果を見ながらのゆっくりしたペースで建造されました。完成は1923年7月になります。

日本でも英国のこうした動きを敏感に察知して本格的空母の建造を模索します。そこはマネのうまい日本人のこと、実験艦「フューリアス」の実験成績と創作艦「ハーミーズ」のいいところをちょうだいして、1920年に空母「鳳翔」を設計、建造を開始します。ちなみに、「鳳翔」という艦名は2代目で、初代は幕末頃の英国生まれで、長州藩から政府に献納された砲艦でした。台湾征討や日清戦争などに参戦しています。空母「鳳翔」

の設計は、艦首形状や直線的な船体から類推できるように、3500トン・5500トン軽巡洋艦の設計者でもある河合定二造船中監(のちの造船中佐)、そして田路 坦少監です。「鳳翔」は英海軍の空母「ハーミーズ」よりわずかに早い1922年11月27日に就役し、純粋空母として設計・建造された第一艦、つまり“世界初の空母”の荣誉に浴することになりました。

## ●鳥型空母から平甲板型空母へ

新造時は、右舷前に塔型の艦橋と三脚檣、揚収用クレーン、起倒式煙突を装備、飛行甲板の前半に下り傾斜をつけるという艦装でした。搭載する飛行機の機種や活用法など未確定なことがらばかりのなかで設計したのですから、設計者の苦労・苦心はいかばかりだったことでしょう。その後、実際に発着艦試験を行なった搭乗員から、甲板が狭いため塔型艦橋が発着艦に邪魔なこと、飛行甲板前部の傾斜はないほうがよいことなどの意見が出され、これらを容れて、竣工から2年弱の1924年6～8月に艦橋を撤去、平甲板型に改装されました。艦橋とともにクレーンも撤去されました。鳥型空母時代が短期間だったということで、ここでは「鳳翔」を平甲板型グループに入れていきます。

羅針艦橋は飛行甲板下の格納庫前端に移されました。揚収装置の後ろには新造時から搭載している14cm単装砲が2基あるので、艦橋はその後ろになり、艦首からかなり後退していました。眺めはかなり悪かったことでしょう。艦首乾舷が低く

艦首波の打上げが激しかったようですから、このくらい後退させておく必要があったということなのでしょう。航海艦橋(のちに上空直衛指揮所)は前部昇降機附近の舷側ポケットにあります。右舷ポケットには起倒式の主檣を設置しました。航海艦橋基部は舷側から外側に張り出しており、下辺に舷側のフレアを延長して曲面処理がなされているところがしゃれています。

制動装置は当初は英国から輸入した縦索式です。縦索式制動装置は20mほどの鋼索を何本も縦に張って駒板で飛行甲板上15cm上げておき、飛行機の脚に備えたフックで鋼索をひっかけて摩擦抵抗でもって速度を殺し停止させる機構です。しかし、制動効果が弱く、事故が絶えなかったといわれています。当時の海外の空母もこの縦索式制動装置を採用していましたが、不都合が多かったため別の方法が研究されており、やがて横索式が発明され実用化されると、各国とも置き換えていきました。起倒式煙突は水平状態でのみ使用することとして飛行甲板の切欠きを埋めましたが、1935年の第四艦隊事件の損傷修理の際に起倒装置を撤去しました。これにより60トンもの軽量化になったそうです。

## ●改装工事

航空機の発達はめまぐるしく、1万トンに満たない排水量の「鳳翔」は大型化する航空機には小さすぎて実用性の低い空母とみなされるようになります。しかも前後に分かれた格納庫、対空火器を装備しづらい船体構造、25ノットの低速など、

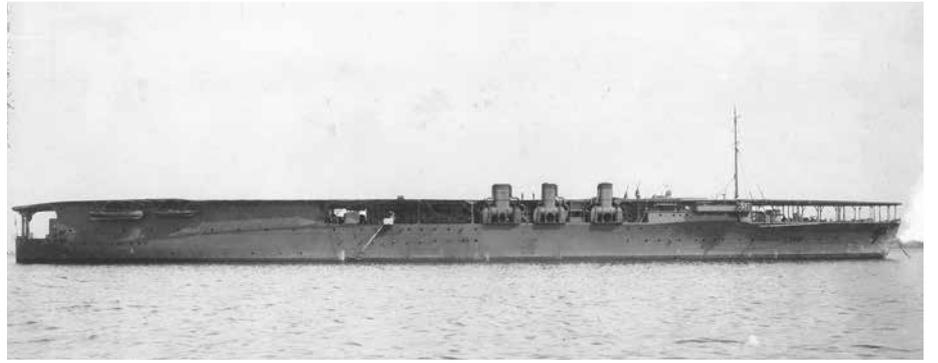
空母として装備の古さが目立ち、近代化大改装は見送られました。とはいえ「鳳翔」も重要な戦力の一端ですから、使い勝手を向上させる改装はたびたび実施されています。1930年には不便だった縦索式制動装置が横索式の萱場式制動装置に換装され、また飛行甲板の一部貼替えが行なわれました。1931年頃には後部格納庫外舷に舷外通路が設けられます。1935年の損傷修理時には、舷外通路は不便なため艦内通路を設置し、舷外通路は飛行甲板下部に懸垂している端艇の作業用として残されます。飛行甲板上の隠頭式8cm高角砲は撤去し、前部昇降機の両舷にスポンソンを設けて13mm連装機銃各1基を装備しました。

●開戦当初

1928年4月に「鳳翔」は、前年に竣工した空母「赤城」とともに、第一航空戦隊を編成しました。日本海軍最初の空母による戦隊です。その後も第一航空戦隊に所属して、「赤城」や「龍驤」などと組んで大陸での作戦に加わっていましたが、1935年10月の第四艦隊事件で大きな損傷を受けたあたりから「鳳翔」の出番は減ります。前線には出ず、内地での訓練用として使われることが多くなります。1937年に近代的空母の第一弾「蒼龍」が完成して以降は、日華事変には出動しますが、すぐに内地にもどるなど、次第に第一線から離れた任務が主となります。なお、この頃に萱場式着艦制動索を呉式制動索に換装したようです。

太平洋戦争開戦直前の1940年11月15日に第一艦隊第三航空戦隊に編入され、南支方面に出動しますが、目立った行動はなく、内地にもどりませんでした。開戦時の1941年12月には布哇作戦の支援のため呉を出撃しています。搭乗機を飛ばし第一艦隊主力の上空哨戒と対潜護衛を行なうことが主な任務です。また、1942年6月のミッドウェー作戦では第一艦隊附属部隊に所属して主力部隊とともに出撃しました。そして機動部隊全滅の知らせを受けて偵察に向かった「鳳翔」搭載の九六式艦攻が大破漂流する「飛龍」を発見しました。しかし、救援に向かった駆逐艦「谷風」が到着したとき、すでに「飛龍」は沈没したあとでした。

ミッドウェー海戦敗戦後の艦隊編制改定で「鳳翔」は第三艦隊附属に編入され、同年10月には機動部隊訓練部隊への配属が決まり、以降は搭乗員の訓練にいそむこととなります。



1924年に塔型艦橋を撤去、艦橋は飛行甲板下の格納庫前端に移設した。また、飛行甲板の前部を水平に変更した。写真は1924年の撮影。起倒式煙突はそのままで、写真では起状態で写っているが、以後は倒状態でほぼ固定された。1番煙突の前には8cm高角砲2門が写っている。全体にシルエットが低く空母

としては小型だったため、荒天時にはかなりガブったようである。艦尾の開放スペースは発動機調整所である。後部格納庫壁に通路があるように見えるが当時はまだ舷外通路は未設置。飛行甲板サイドの防護ネットの影である。

●日本空母の一部始終を知る「鳳翔」

1944年には飛行甲板を拡張する工事を受けます。新鋭艦上攻撃機天山や艦上爆撃機彗星の発着訓練ができるようにするためです。この改装により飛行甲板が船体から大きくはみ出し、外洋には出られなくなりました。こうして「鳳翔」はほぼ無傷で終戦を迎えることができました。訓練空母の任務に従事したおかげともいえます。戦後1945年秋に撮影された「鳳翔」の航空写真には、飛行甲板に迷彩が施されていた様子が写っています。不規則な模様で描いてあり、モノクロ写真なので色みはわかりませんが、「瑞鳳」に塗られていた暗緑色、褐色といった陸地に欺瞞するための色調であろうと想像されます。

ところで、戦時中につくられた国策映画『雷撃隊出動』に「鳳翔」が出演していることをご存じでしょうか。敵空母の役で雷撃を受けて黒煙を上げながら逃げまどう役ドロコです。シルエットでしか出てきませんが、独特な艦姿からすぐに「鳳翔」とわかります。また、今度は空母「瑞鶴」の代役でも出演しています。全姿は映りませんが、主人公の雷撃機搭乗員が艦内から飛行甲板に上がるまでの艦内の様子は「鳳翔」が使われています。それは、搭乗員が船首楼甲板の通路を歩くと見える外舷に湾曲して延びる煙路によって同艦であると特定できます。傾斜梯子をのぼって飛行甲板に出ると、バックを合成した画面の「瑞鶴」艦上シーンとなり、搭乗員は天山に乗って迷彩された

「瑞鶴」の飛行甲板から飛び立つのでした。筆者が最初にこれらのシーンを見たときは湾曲する煙突をもつ空母に該当する艦が思い当たらず、「鳳翔」だとわかったのはのちに一般機装図を見たときでした。この艦内シーンで見られる「鳳翔」のディテールはとても貴重です。

●「鳳翔」の魅力

「鳳翔」と同じ時期に建造された英国の「ハーミーズ」は「鳳翔」とほぼ同大の空母ですが、大きくはない船体に似合わぬ大きな艦橋をもっています。エンクローズドパウという新機軸は魅力ではありますが、船体と煙突・マストを含む艦橋の巨大さはアンバランスに見えます。その点「鳳翔」はきわめてバランスのとれた艦橋の大きさや位置ではないかと思えます。それでも艦橋が邪魔だったというのですから、「ハーミーズ」はだいたいぶだったのでしょうか。パイロットの腕の差なのかな。

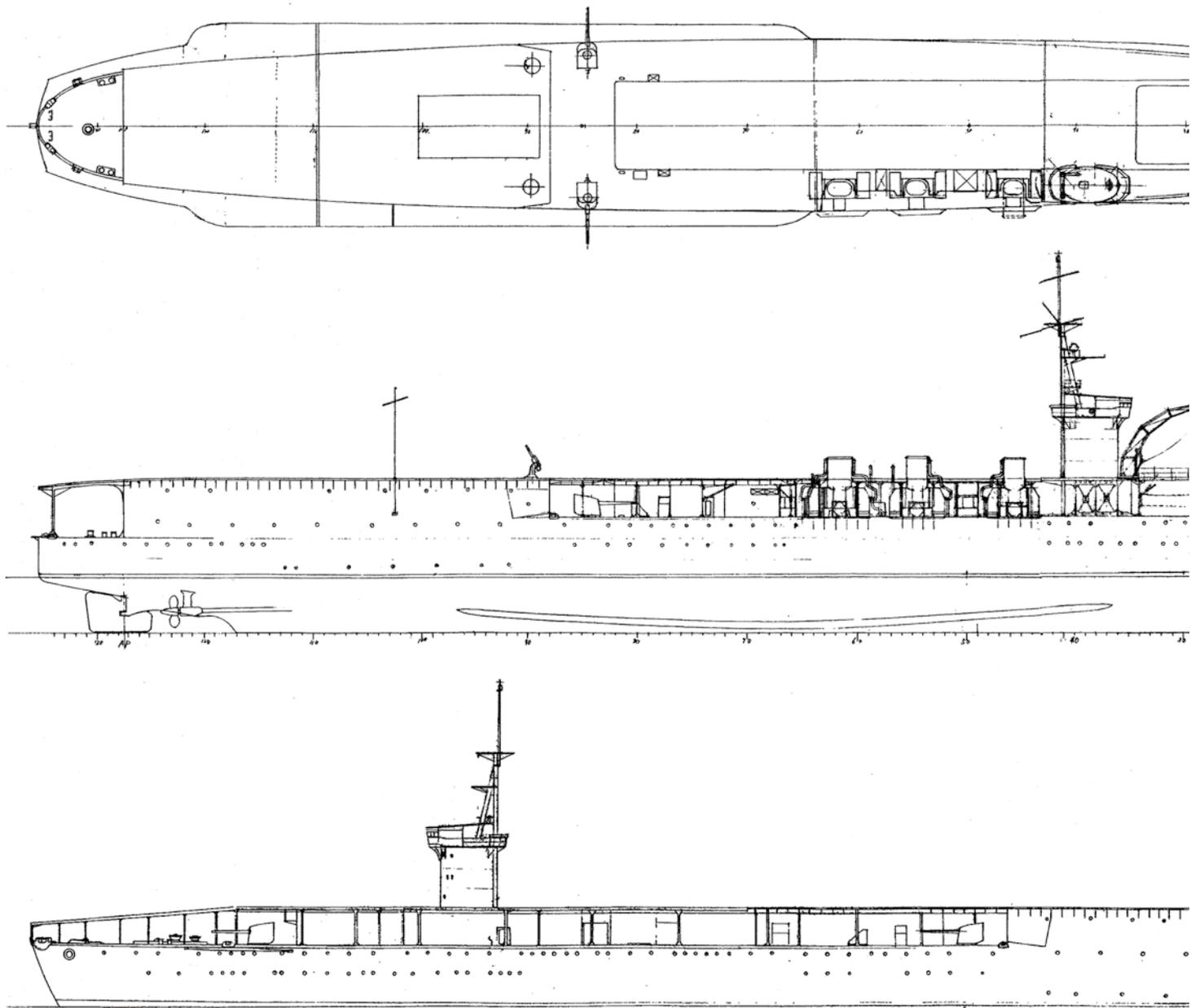
平甲板型に改装された「鳳翔」は、低いシルエットと幅の狭い飛行甲板をもち、前時代的なスプーン型パウなど、時代遅れな印象を受けます。しかし、巡洋艦を思わせる細長い船体と全長にわたる飛行甲板との取合はバランスがとれていて大きな魅力です。1944年に飛行甲板長と幅が拡張されてからは、船体外にはみ出す飛行甲板を載せた姿がアンバランスになってしまい、筆者の好みではなくなってしまいました。



湾内を微速で航行する「鳳翔」。1931年頃の撮影。キャンバスを張ってある所は露天の補助艦橋で、右舷には起倒式の主槽が立ち、根元に信号所がある。主槽は何本ものシュラウド(索)で縛られている。飛行甲板前端は新造時の半円形のまま。写

真では起倒式煙突が完全な横向きではなくやや上向きになっているのが興味深い。後日、起倒装置を撤去して固定式になったが煙突の角度はこの写真の角度に近いものだった。「鳳翔」は前後の格納庫が別々で使い勝手が悪かった。また、艦尾との連絡

路がなく不便だったが、1931年に後部格納庫外壁に舷外通路が設置された。通路には手摺はなく、舷側のジャッキステーをにぎって歩行する。したがって航海中は使用できなかったと思われる。(写真提供/大和ミュージアム)



## 鳳翔1922



「鳳翔」の新造時をモデル化したキットは、フジミが静岡模型教材協同組合から離脱して独自にシーウェイライン・シリーズを立ち上げた

1992年に発売されたものが唯一である。内容は一体成型の船体に飛行甲板、ランナー2枚のパーツ。モールドはシンプルで、ディテールは

モデラーにゆだねられていた。この作例ではキットを素材として使用し、ほとんどスクラッチビルドに近いアプローチを行なっている。塔型

の艦橋構造物は羅針艦橋が露天でキャンバス張り、主樑は三脚構造となっている。艦橋前に置かれた大型クレーンのディテールに注目。

# 日本海軍航空母艦鳳翔

## 1922年

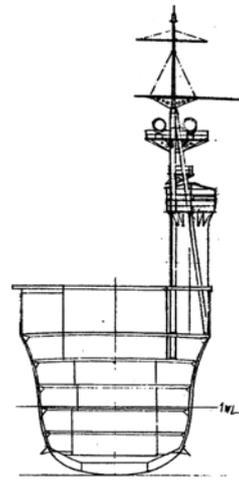
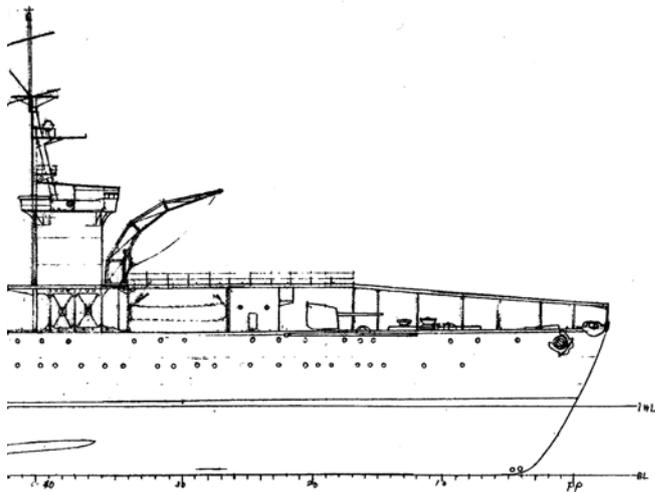
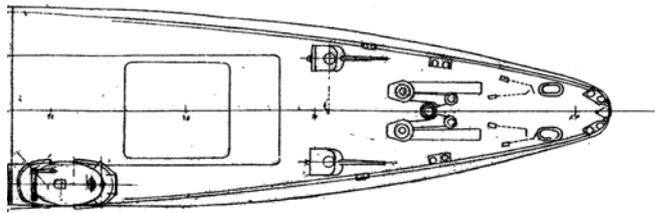
### ◆「鳳翔」1922年艦型図

新造時の「鳳翔」の一般艦装図を筆者は未見です。ただ、新造時の公式図の一部が遠藤 昭著の「日本軍艦史稿」に掲載されたことがあります。艦橋、起倒式煙突、昇降式高角砲の筒構造などの部分図でした。掲載の図はこれらの資料と、比較的点数がある新造時の写真、そして後述の「鳳翔」昭和14年時の一般艦装図をもとに、新造時の姿を推定して描きました。したがって、資料のない箇所、とくに前部格納庫壁面（両舷）などの詳細な状況はわからず、描いていません。

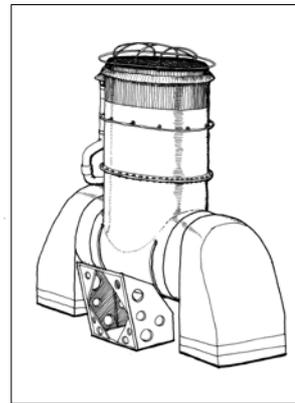
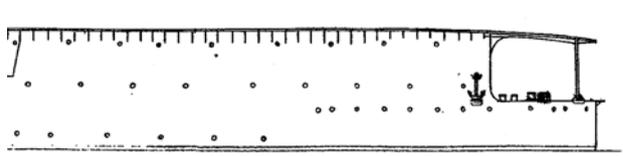
「鳳翔」は船体および格納庫の設置状況から、舷外装備を設置しづらい恰好だったようで、外観がとてもシンプルです。新造時のポイントとはいえば、やはり奇妙な形状の艦橋と三脚檣でしょう。楕円柱の艦橋基部は建造中の写真からもわかり、前方腰板の角ばった羅針艦橋が乗っています。「日本軍艦史稿」の図では羅針艦橋の右舷に沿って2.5m測距儀が据えつけてあり、レールに乗って移動できる構造が描かれています。羅針艦橋は露天式で、三脚檣との間に棧を設けキャンバスの天蓋を張る構造になっています。

飛行甲板の前端が約5度の角度で下降しているのは発艦の際に加速をつけるためとされましたが、墜落する危険がありかえって不都合とわかり、平甲板型に改装されるときに水平に修正されました。甲板先端が円弧である点も他の空母にない艦装例といえます。

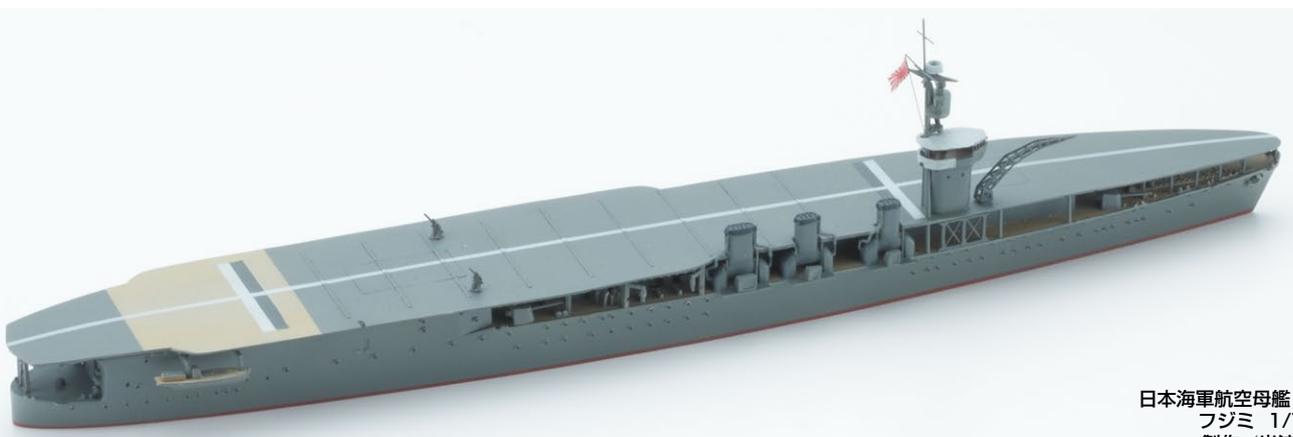
ユニークなのが起倒式煙突です。起倒メカニズムはわかりませんが、模型化するときには見どころとなる部分でしょう。もうひとつユニークなのが艦首側と前後格納庫の間の両舷通路部に平射14cm単装砲が計4基装備されている点で、この装備も他に例を見ないものです。後部格納庫の前端壁が内側に逃げていのは、砲の射角を極力広くとるための工夫と思われます。4基の砲は飛行甲板の拡張を行なった1944年に撤去されたようです。なお、最終時の図面は資料不足もあって未調整のため掲載できませんでした。



40番フレーム切断



「鳳翔」の第1煙突の推定イラスト

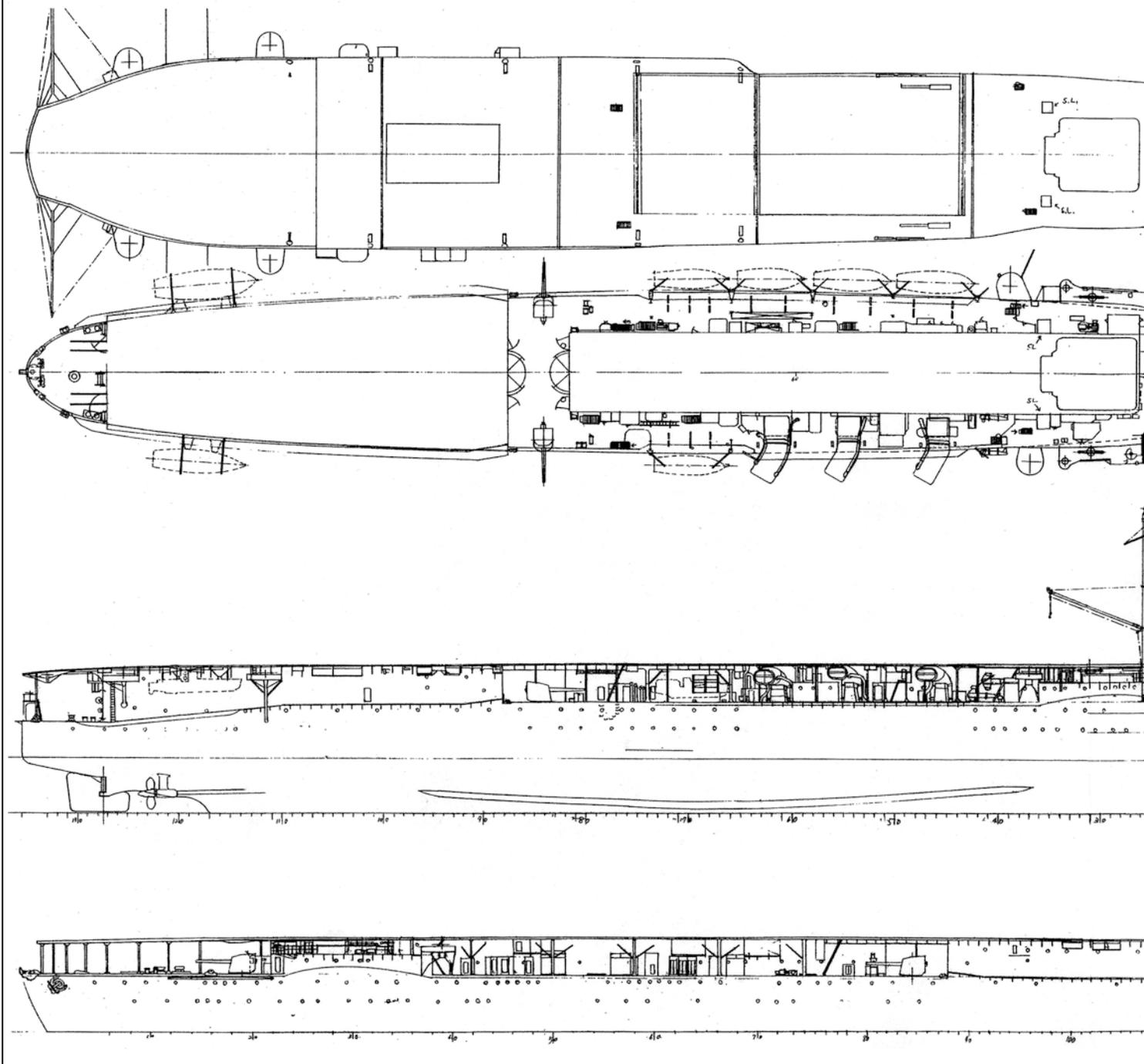


日本海軍航空母艦 鳳翔  
フジミ 1/700  
製作/米波保之

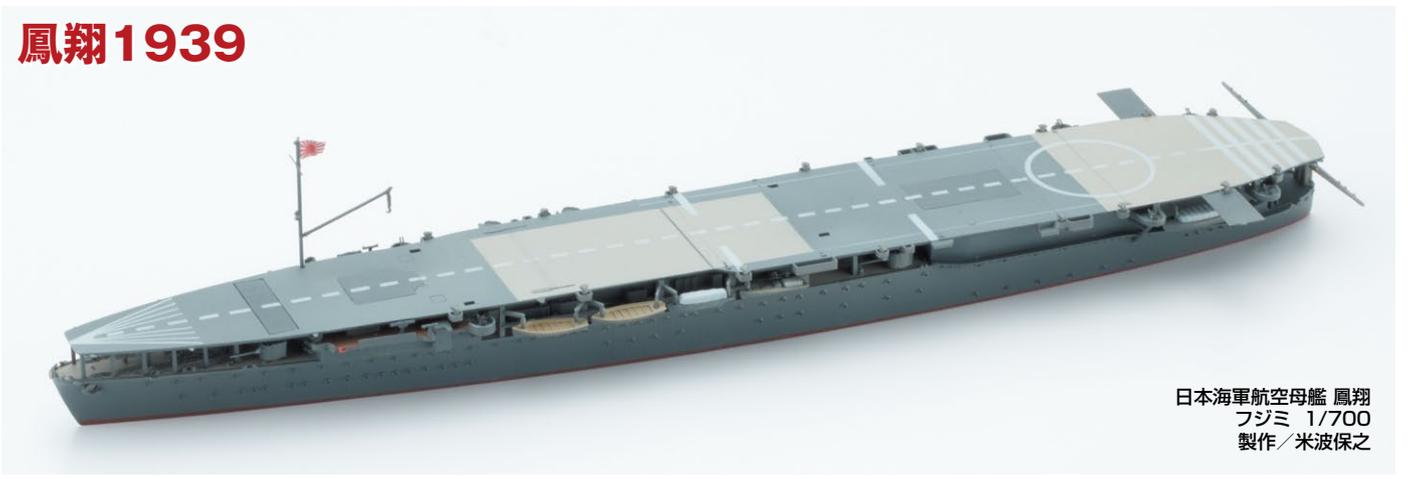
見どころは起倒式の3本の煙突である。ただし機構のわかる詳細な写真がないので、雰囲気重視で造形するしかない。前部格納庫の舷側側は

端艇などの格納場所となっている。この附近と艦首には多数の支柱が立っていて、それらを実感的に再現するとグレードが上がる。キットに

は原寸図がついていて舷窓は自分でドリルで開口するのだが、きれいにラインを揃えて開口したいところだ。



## 鳳翔1939



日本海軍航空母艦 鳳翔  
フジミ 1/700  
製作/米波保之

「鳳翔」1939年は公式図があるので、かなり精密な再現が可能である。フジミは特シリーズで2011年にキット化している。また最終時の飛

行甲板を拡張した姿も、エッチング製飛行甲板をつけた限定版で発売した。新造時のキット化と違い、この時期のフジミはディテールの細密

表現を追究し、きわめて濃密なディテールがパーツ化されていて、ほとんどディテールに手を加えるところはない。唯一、全長がやや短い

が難であるが、バランスには問題がない。作例はさらにディテールの調整を行ない、日華事案などに出勤した「鳳翔」の姿を再現してある。

# 日本海軍航空母艦鳳翔

## 1939年

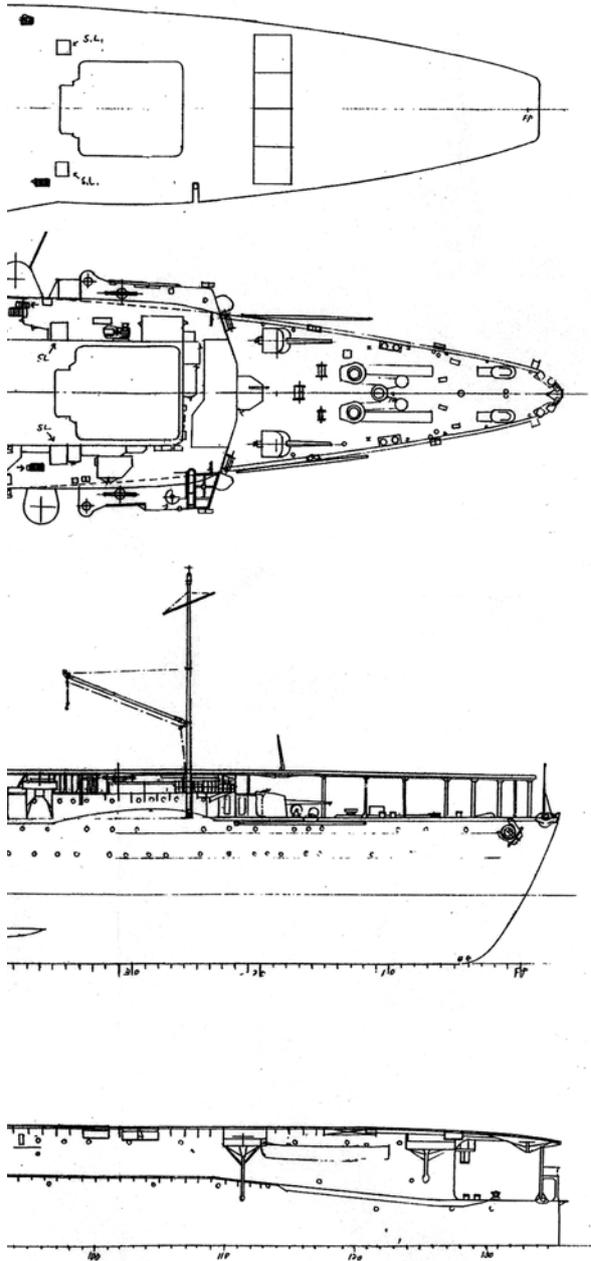
### ◆「鳳翔」1939年艦型図

呉の大和ミュージアムで公開される前に『海軍艦艇公式図面集』（今日の話題社）に収録されて初めて世に出た「鳳翔」の1939（昭和14）年の一般艦装図をもとに描きました。図面集を買ったとき、まさか「鳳翔」の艦装図が保管されていたとは思いませんでしたので、たいそう驚き、うれしかったものです。これをもとに、ウォーターラインシリーズの水上機母艦「千歳」（青島文化教材社、1979年初版キット）の船体を改造して「鳳翔」を作りました。「千歳」と「鳳翔」の上甲板の平面形と乾舷高さがほぼ同じだったことからの流用です。「鳳翔」のような飛行甲板の内側に格納庫壁のある形状は写真では暗くて判別が難しく、図面があるとないとでは正確さが段違いです。

30番フレーム断面の艦橋正面図は、図面集にはなく、月刊「丸」の巻頭グラビアに出た艦橋附近を写した写真からそのように判断したもので、もしかすると違うかもしれないのですが、ガラス窓が羅針艦橋のセンターに向かって下がっているように見えるのをもとに描いたものです。飛行甲板が上を覆っているので視線を下げるためかと考えました。羅針艦橋の前に突き出しているのが操舵室です。

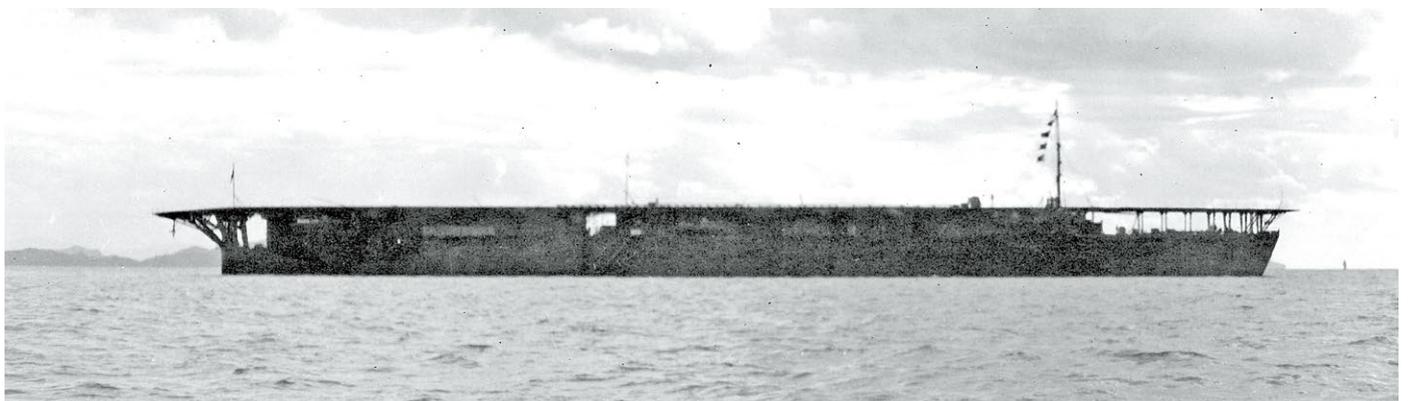
艦橋の両舷に舷側より少し張り出しているのが上空直衛指揮所で、張出し部の側面を舷側のフレアに合わせてフェアリング処理しているあたりは、日本の造船の余裕を感じさせます。煙突は、新造時の起倒式をやめて倒状態に固定した状態を示します。真横向きではなく、少し後方に振られています。米空母「レンジャー」が当初の起倒式をやめて倒状態に固定しているのと同様で、起倒装置の重量が大きく、この撤去は「鳳翔」も「レンジャー」も復原性がよくなかったことへの上部重量軽減策のひとつだったようです。左舷側の首楼甲板は端艇置場になっています。揚収は飛行甲板支柱に取りつけた一對のデリックです。大きな12m内火ランチ（左舷）と11m内火艇（右舷）は甲板支柱の間に収まらないためか、後部格納庫壁に懸垂格納するようになっています。艦尾の格納庫から後ろの上甲板は発動機調整所です。格納庫の後部壁に2箇所扉があり、格納庫内から艦尾へ出る2組の台車用軌条が見られます。

上部平面図には珍しく木甲板部が明示されているので、首楼甲板平面の上に別に飛行甲板平面を描きました。艦型図では略式に表現していますが、1番伸縮接手の直後から2、3番伸縮接手の間の長方形と、3・4番機銃の少し前の横線から艦尾までの両舷いっぱいが木甲板の縦張り部分です。1930年に制動装置を縦索式から萱場式横索に換装したときにこの状態に変わったとされています。



30番フレーム切断

55番フレーム切断



「鳳翔」は1944年頃、外洋へ出ないことを前提に飛行甲板を前後に延長して、船体長168.25mを上回る全長180.8mとし、幅も一部広げる改装工事が行なわれた。およそ千歳型空母の飛行甲板長に相当する。同時に飛行甲板の補強工事も行なった。これらは5トンを超え

る天山や彗星などの新鋭機の発着艦訓練ができるようにするための措置だった。このとき、エレベータの寸法を一部拡張した。また、着艦制動装置は最新の三式10型が装備された。なお、4門の14cm主砲はこのときに撤去したようだ。終戦後に米国調査団が撮影した何枚かの画像に

より1944年に実施された改装をおぼろげながら知ることができる。写真は1945年10月、呉にて撮影された「鳳翔」。シルエットに近い画像なのでディテールは充分には読み取れないが、飛行甲板延長部分の甲板支柱の様子や、側面に施された迷彩が（画像の明度処理により）

一部見て取れる。ちなみに、別の米国調査団撮影の空中写真には、飛行甲板と左舷側にある迷彩が明瞭に写っていた。

ISBN978-4-499-23343-9 C0076 ¥4000E

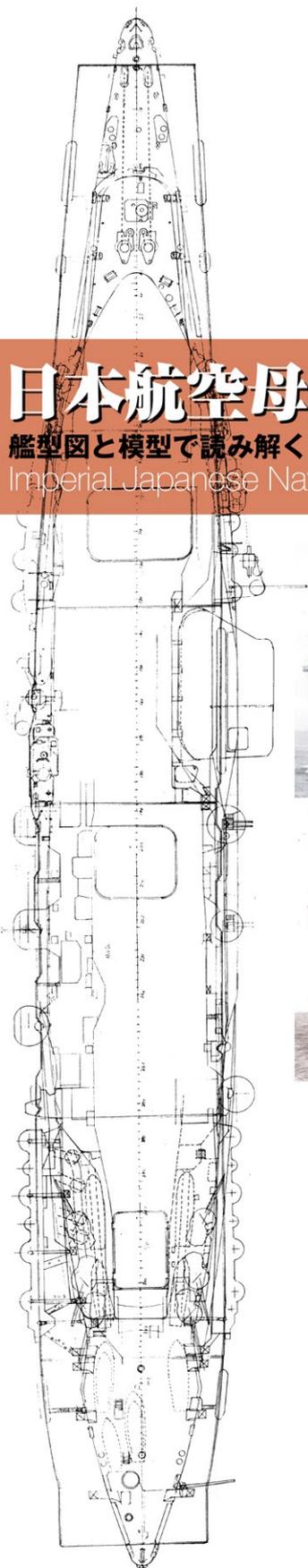


9784499233439

定価(本体4,000円+税)



1920076040009



# 日本航空母艦ピクトリアル

艦型図と模型で読み解く平甲板型空母と島型艦橋空母

Imperial Japanese Navy aircraft carriers pictorial

